

歴史の中の 女たち

第 32 回

フリーダ・カーロ

(1907 ~ 1954 年)

ー メキシコの女流画家 ー

伊藤 滋子



http://es.wikipedia.org/wiki/Frida_Kahlo

ラテンアメリカの女流画家として最も有名なフリーダ・カーロは46年の生涯に200点余りの作品を遺した。そのほとんどが自画像もしくは自分に関する事柄をテーマとした絵で、作品自体が彼女の自伝そのものといえるほどである。それも自分の胸を切り開いて心臓をえぐりだし、キャンバスにぶつけたような赤裸々な自伝で、愛、喪失、病気、流産、夫リベラに対する永遠の情熱、自然観、メキシコ的なものがその主なテーマだ。彼女は「私は描きたいという思いに駆られて絵を描く。他のことは一切考えず、頭に浮かんだことをそのまま描く。自分のことを描くのはそれが最もよく知っているテーマだから」と語るが、そこには自分の絵を他人に分かってほしいという訴えやおもねりは見られず、反対に見るものを当惑させることの方が多い。しかし一旦それを見てしまった人は魅入られたようにそこに引きずり込まれ、もう簡単に目をそらすことはできない。フリーダの絵は生涯に受けた手術が32回に上るといふ身体的苦痛や、あるいは他人には計り知ることのできない精神的苦痛に苛まれながら、社会の常識や道徳と戦いつづけた彼女の壮絶な人生の結実であった。

幼少時のフリーダに一番影響を与えた父ギリエルモ・カーロはドイツで育ったユダヤ系ハンガリー人で、19才で単身メキシコに渡ってきた。ユダヤ人ではなくルーテル派のドイツ人という説もあるが、いずれにせよ宗教には無関心だった。彼は結婚したメキシコ女性の父から写真技術を習い、革命前のボルフィリオ時代

は国内の建造物の公式写真家として成功していた。妻が女兒二人を遺して出産で亡くなったあと、メステイサの女性と再婚して生まれたのがフリーダであった。彼女はこの父に心からの愛情と尊敬を抱き、誰よりも自分を理解してくれたと語っている。

フリーダの最初の災厄は6才の時、小児麻痺にかかったことだった。9カ月間父は献身的に彼女の面倒をみてくれ、その後右脚が十分に発育せず、びっこを引く後遺症が残ると、彼女を遠足に連れだし、あるいはリハビリのためにさまざまなスポーツをさせて心身ともに彼女を鍛えようとした。友達から脚のことをからかわれると、勝気で攻撃的な彼女は悪態をつきながら相手を追いまわしたという。

父はメキシコ革命の勃発で公式写真家としての仕事を失い、家計が苦しい中、フリーダをドイツ人学校へ通わせた。ついで彼女は医者になろうとして、15才でその頃はじめて女性に門戸を開いたメキシコで最難関の国立予科高等学校へ入学した。全校2000人のうち、女生徒は新入の35人だけだった。病気で小学校への入学が遅れたため、同級生より3才年上のフリーダは気まじめな女生徒たちとは馴染むことができず、過激派の男子生徒の集まりである『帽子グループ』に加わった。革命後、初代文部大臣として民衆教育を推進したホセ・バスコンセロスの社会主義的な思想に共鳴する生徒たちのグループで、帽子がその目印だった。バスコンセロスはメキシコ独自の芸術・文化の振興と民衆の教育を兼ねる壁画運動を主導し、その最初の作品としてディエゴ・リベラが彼らの学校で壁画を制作中だった。フリーダは壁画と画家自身に強い好奇心を抱き、そこに行っては彼の当時の妻ルベに追い払われたという。『帽子グループ』の多くは後にメキシコ左翼運動の指導者となったが、フリーダは彼らとともに

本を読み、音楽を聞き、教授陣にいたずらをしかけ、論戦をくりひろげ、青春を謳歌する。父の友人から版画を習ったりもしているが、芸術を職業にするつもりは全くなかった。

ところが18才の時遭遇した2番目の災厄によって彼女の運命は急転する。下校中に乗っていたバスが電車と衝突して、腹部に金属の手すりが突き刺さり、脊椎に3カ所、骨盤、鎖骨、肋骨2本、右脚に骨折、左肩脱臼という瀕死の重傷を負ったのだ。1ヶ月の入院と2カ月の自宅療養を強いられ、さらに90日間上半身を石膏のコルセットで覆われた。もう学校には戻れず、医者になる夢は断たれ、痛みで悩まされながら死の影に怯え続ける身体となった。「友達は徐々に女になっていくのに、自分は一足飛びに老人になってしまった」とその焦燥を語っている。療養中の退屈しのぎに友人や家族の肖像画や自画像を描き始めたことが絵の道に入るきっかけとなった。

事故から2年後ようやく普通の生活が送れるようになった時には、『帽子グループ』の仲間たちはすでに予科高校を卒業して大学で左翼活動に入っていた。彼らとの交友を再開したフリーダは共産党に入党し、そこで友人から同じ共産党員であったディエゴ・リベラを紹介される。彼女の言に従えばそれが3番目の、人生で最も重大な災厄となった。フリーダは自分の絵を彼に見せ、描き続けるべきかどうか意見を乞うと、彼は絵を続けることを勧め、それを機に彼女を訪れるようになった。2番目の妻ルペと別れたばかりのリベラには3人の娘があり、この時42歳でフリーダの倍も年上、異常に太っていて、宗教心は全くなく、共産党員、おまけに有名な女好きというので、彼女の母は余りいい顔はしなかったが、父はフリーダは生涯病身だということをリベラに念を押しただけで、反対はしなかった。1929年、22才のフリーダはリベラと結婚した。

フリーダが描く絵は結婚を機に一変し、今までのロマンチックな画風からメキシコ的な要素を多く取り入れたものになった。壁画運動に代表されるように、当時多くの芸術家が芸術を特権階級の独占ではなく、一般大衆にも親しめるものにしようと努め、同時に積極的に作品のなかに大衆芸術を取り込もうとしていた。フリーダもリベラに感化されてその流れに沿っ

た絵を描き、メキシコ共産党がスターリン主義に傾きリベラが共産党を脱退すると彼女もそれに従う。また、それまで髪を短くし、ズボンで細い右脚を隠せる男装を好んだが、リベラの勧めでテワンテペクの民族衣装テワナを着るようになった。その服はメキシコ至上主義や先住民文化への回帰を主張するとともに、長いスカートで脚も隠すことができた。母の出身地でもあるその地方は女性の力が強いということで有名で、当時メキシコのインテリ女性の間でテワナを着ることが好まれていた。テワナ姿の自画像にはそれにふさわしい花、野草、サボテン、熔岩、飼っていた猿、毛のないメキシコ犬、オウムなどメキシコ的なものを描きこむ。そして家にもメキシコ調の家具、エナメルを塗った絵、

仮面、紙の人形、奉納画などの民芸品を飾った。リベラがクエルナバカで制作を始めるとついてゆき、かいがいしく世話を焼く。しかし間もなく、流産、リベラの浮気などで、生涯続く苦しみが始まり、彼女は絵を描くことでそれを癒そうとした。

結婚の翌年、リベラ夫妻は渡米する。カリェス大統領(1924-30)の時代、メキシコの政治は右傾化

し、多くの共産党員が投獄され、リベラが予科高校に描いた壁画も右翼の学生に破壊されて、壁画運動は受難の時代を迎え、芸術家たちのアメリカへの《脱出》が始まっていた。リベラには次々に壁画の注文が舞いこみ、滞米生活は3年に及ぶ。この間フリーダは右足の変形と痛みが増して健康が悪化したうえに、また流産した。サンフランシスコでは生涯頼ることになる医師にめぐりあい、身体の不調は交通事故が直接の原因ではなく、生まれつきかあるいは小児まひによる後遺症、たび重なる手術、無理な歩き方などが重なって生じたものと診断された。骨盤の変形で胎児の生育を維持することができず、生涯3度流産や墮胎で子供を失っているが、彼女はその度に大きなショックを受け、寒々とした病室に出血しながら横たわる自分の絵、死んだ子供の絵などを描いている。だが時間のほとんどを絵を描きながら過ごしているのにもかかわらず、まだ自分をプロの画家とは意識せず、ただリベラの『見かけは愛らしいが骨のある妻』の役割に甘んじるだけだった。英語も得意で民族衣装は珍しがられて社交界でもてはやされ、注目されることが好きなフリーダ



メーデーの行進に参加するフリーダとリベラ(1929)
<http://planetgroupentertainment.squarespace.com/frida-kahlo-for-library-distri/>

にとってアメリカでの居心地は決して悪くはなかったが、冷やかな都市文明と温かみのあるメキシコを対比させた画を多く描きながら、早く帰国したいと望んだ。反対にアメリカのダイナミズムに魅了されたリベラは、もう少し長く留まりたかったのだが、皮肉なことにニューヨークのロックフェラー・センターの壁画にレーニン像やソ連のメーデーの行進を描きこんだことで契約を破棄され、1933年追い出されるようにして帰国した。

帰国後リベラはアトリエが二つある家建てて、フリーダも本格的に絵に打ちこもうとしたが、体調が悪化して堕胎手術や、足の指を数本切り落す手術を受けなければならなかった。それに加えてリベラはまたも派手な女性関係をはじめたばかりか、今度はフリーダが愛していた妹のクリ스티ーナをモデルとして描いているうちに、彼女と関係を持ってしまった。傷ついたフリーダは一旦別居するが、夫と妹の関係が終わると家へ戻った。その後もリベラの女性関係は相変わらずだったが、フリーダ自身も日系の彫刻家イサム・ノグチなど様々な男性や、時には女性とも関係を持った。リベラは妻の男性との恋愛関係には嫉妬したが、女性との関係については無関心だったという。

だが二人の政治に対する関心は高く、リベラはソ連の圧力でノルウェーから追い出されようとしていたレオン・トロツキー夫妻の亡命を受け入れるように政府に働きかけ、メキシコに民主政治をもたらしたラサロ・カルデナス大統領（1934～40年）は亡命を承認した。1937年初め、タンピコ港に到着したトロツキー夫妻を出迎えるフリーダの写真は世界中に報道された。リベラ夫妻はフリーダの実家をトロツキーに提供したが、彼女はリベラに対する復讐のつもりか、そのトロツキーとも短期間恋愛関係を持つ。3年後彼が暗殺された時、フリーダは激しく泣いたという。

1938年、フリーダはニューヨークでもまだ数少ない前衛絵画専門の画廊で初めての個展を開いた。彼女は人が自分の絵に興味を持つとは思ってもいなかったので、その話が舞いこんできた時は少なからず驚いた。しかしアメリカが恐慌の最中であるにもかかわらず、展覧会は成功し、ニューヨーク近代美術館などからの制作の注文を受けた。続いてメキシコに来た時に知り

合った詩人アンドレ・ブルトンの招きでパリでの展覧会に参加するが、こちらの方は散々な結果に終わった。シュールレアリズムの大御所だったブルトンはフリーダの絵をシュールと考えたが、そもそもフリーダが描いたのは夢や妄想、中性的なシンボルといった約束事のあるシュールの世界などではなく、絵はすべて彼女自身の現実だった。だがルーブル美術館は彼女の絵を一枚買いあげてくれ、それはメキシコ人画家としては初めてのことであった。

帰国した彼女を待っていたのはリベラの離婚の要請だった。彼は展覧会の成功でもうフリーダは画家として

独り立ちできると考えたようだ。離婚後フリーダはリベラの経済的援助を断り、絵で生きて行こうとエネルギーギッシュに制作に取り組む。しかしその当時の絵は付属品や背景、色付けが違うだけの、売るために描いたことが一目で分かる、民芸品のような自画像が多い。豪華な装飾や髪形とは裏腹に、彼女自身の表情は硬く、ある種の緊張感が漂う。孤独を酒で紛らわせることが多くなり、体

調を崩して、信頼するサンフランシスコの医師を訪れると、偶然そこにリベラも仕事で来ていた。そして彼はフリーダに再婚を申し込む。1年間の別居で彼もまた、自分がいかに彼女を必要としていたかを知ったのだった。リベラは「別離は二人にとって良い結果を生まなかった。フリーダは再婚にあたり条件をつけた。経済的独立を保つために生活費の半分を負担する。そしてもう一つは性的な関係は持たないというものだった。彼女を取り戻すだけで満足だった私はそれを受け入れた」と語っている。1940年末、二人は再婚した。

メキシコに戻った二人の新しい関係が始まった。フリーダは再婚によって精神的安定と恋愛の自由を得、彼女の絵も彼女自身も社会的にも認められるようになった。様々な委員会のメンバーとなり、展覧会への出品も増えて多くの注文が入り、美術学校の教師にも任命される。正式に絵を習ったこともないのに、である。この頃のフリーダの絵には子供の姿のリベラがよく現れるが、彼女にとって夫は生まれてこなかった子供であるばかりでなく、「私の原点、私を築いた者、恋人、画家、愛人、夫、友人、父、息子、私、宇宙、私と関係するすべてのもの」「なぜ私のディエゴと呼ぶのかって？それは願望、今までもこれからも私のものであ



タンピコ港でトロツキー夫妻を出迎えるフリーダ（1937）
http://mujeres-riot.webcindario.com/Frida_Kahlo.htm

ったことはない」と日記に書いている。

だが健康状態は悪化の一途をたどり、右脚切断をはじめ次から次へと大手術を受け、大量の麻酔薬に頼らずには過ごせなくなっていった。1952年、ついに国立近代美術館で個展が開かれるという最高の榮譽を得るが、会場に救急車で運ばれ、ベットに横たわったまま招待客の祝福を受けた。亡くなったのはその2年後で、朝ベッドで息をひきとっているのが見つかり、死因は肺の塞栓症と発表されたが、だれもが自殺を疑わなかった。その前夜、夫に「もうすぐ貴方を置いていかな

ければならないわ」と言って、翌月の銀婚式のために用意したプレゼントを渡し、大量の麻酔剤を吞んでいた。47才だった。

葬儀は国立芸術院で行われた。棺に共産党の旗が掛けられ、政府はその旗を取るように求めたが、リベラはそれを拒否し、そのお陰で彼は後に共産党に復帰することを認められた。「自分の人生にとって最も素晴らしい部分は彼女への愛だったということに気付くのが遅すぎた」と語ったリベラはその3年後亡くなった。

(いとう しげこ)

ラテンアメリカ参考図書案内



『南米への移民 コレクション・モダン都市文化 第93巻』

細川 修平 ゆまに書房 2013年12月 684頁 18,000円+税

大正から昭和初期に花開いたモダン都市文化の様々な記録を再録し、モダニズム研究の総合資料集全100巻の一冊として「移民」を取り上げ、3点の文献を復刻し、編者による解説と詳細な年表を付したものの。日本の近代化は、ハワイへの移民に見られるように、組織を通じた大規模で中長期的な労働人口移動である海外移民と背中合わせであった。農村部から都市部への移住だけでは吸収できない人口が、国策として国が直接・間接に関与して行われ、その宣伝のために数少ない成功談を紹介する移民奨励本も多く出版された。

本書では、永田 稠(しげし) 日本力行会会長による南米視察巡回写真集である『南米日本人写真帖』(1921年発行、日本力行会)、短期間に農園経営で成功して帰国した古澤清外の『ブラジル移民としての五年間』(29年刊の海外興業(株))、メキシコに留学した後外務省に入り、25年間を中南米で過ごした外務省きっての中南米通であった甘利造次の『コロンビア国事情』(30年、植民同志会刊)をそれぞれ写真復刻し全編収録している。

永田は開拓精神をもった海外発展を推進した日本力行会の会長を長く務め、北米、南米等での拡大を目指し、1920年に文部省の命で北米とともにブラジル、アルゼンチン、チリ、ペルー、パナマへ在外子弟教育調査のために3ヶ月回った視察を写真で綴った記録である。

古澤は1922年に一家でブラジルに渡った移民だが、英語ができポルトガル語も習得して、1年間の契約農生活後自立して農園経営に成功し、5年の滞在で長女夫婦を残して帰国した“模範的成功者”で、より多くの移民希望者をと意図する移民業界大手企業が刊行したものである。甘利が記述したコロンビアは、1908年に外交関係が出来、移民も29年以降戦前には約200名しか渡航していないが、有望移民先としては注目され、農業のみならず商業や貿易の可能性についても触れ、当時外務省の中南米通が農、鉱、工業、貿易にいたる実務環境、移民の生活訓に至るまで記述している。

異なる3つの視点から記述した移民関係刊行物の再刻と解説、整理された年表は、移民史の貴重な記録である。

(桜井 敏浩)